

W・シュルツの〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とマルクス

植 村 邦 彦

はじめに

ヴァイルヘルム・シュルツ(一七九七—一八六〇)はヘッセン出身の政治的ジャーナリストであり、ドイツ一八四八年革命にフランクフルト国民議会の左派議員として登場する急進的民主主義者の一人である。⁽¹⁾彼の著書『生産の運動』⁽²⁾は、「三月前」期の状況の中で既成の社会諸理論を批判しつつ、資本主義が生み出している社会問題の平和的解決を通して「民主主義」を実現させるといふ主張を、歴史的・理論的に根拠づけようとする彼の主著であり、「多くの信奉者をもったが、また多くの敵をもった著作」⁽³⁾であった。マルクスも、一八四四年の『経済

学・哲学草稿』⁽⁴⁾でこの書物から多くを引用しており、後の『資本論』では、「多くの点で称賛に値する著作」⁽⁵⁾と述べている。

『生産の運動』は、物質的生産、精神的生産——歴史的考察、精神的生産——統計的考察、の三章からなり、大づかみに言えば、第一章は歴史の基礎をなす物質的生産の歴史的發展の叙述、第二章は、それに規定される精神的生産、すなわち、言語・宗教・芸術・科学の原始から現代にいたる形成發展の叙述、第三章は「キリスト教的現代」のヨーロッパ諸国の精神的情况の比較分析、である。この構成からもわかるように、これは、人類史の構想をもった歴史哲学の書であった。

マルクスの思想形成史に占めるこの書物の意義にはじめて注目したのは、A・コルニユであった。彼は、『経・哲草稿』の執筆の際にマルクスに影響を与えた書として、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』、M・ヘスの『スイスから二一ボーゲン』誌所載の諸論文と並んで、「従来ほとんど顧慮されることのなかった」⁽⁶⁾シュルツの『生産の運動』を挙げてゐる。彼のシュルツ評価の要点は、シュルツが「経済的・社会的発展の分析を通じて（中略）一種の唯物史観に導かれた」⁽⁷⁾ということにある。しかしコルニユは、この歴史観のマルクスへの影響を具体的に明らかにするにはいたっていない。以後の諸研究も、この具体的検討は残したままである。⁽⁸⁾

本稿では、まず『生産の運動』の歴史観、コルニユの言う「一種の唯物史観」の内容を明らかにし、その意義を検討した上で、それを『経・哲草稿』のマルクスの思想と対比させながら、マルクスがシュルツから何を受け取り、何を受け取らなかったのか、また何を評価し、何を批判したのかを、具体的に明らかにすることにしたい。

一 分業と生産諸力の歴史哲学

『生産の運動』におけるシュルツのねらいは、歴史の経済的・社会的発展の法則が存在することを明らかにし、その法則に従った社会の未来像を与えることであった。そして、この法則の解明は同時に、現在の社会状態と社会に関する諸理論とを批判し、新しい社会諸関係の組織化のための理論的基礎付けを与えることでもある。「国家と社会の新しい科学の基礎付けのための」というこの書の副題は、このような意図を示すものであった。

シュルツは、現代の社会状態を、資本家と労働者との間の所有の不自然な分配と、それに基づく階級対立の激化の状態として認識する。「我々は、教養と所有、精神的財と物的財の不自然な分配によって生み出され、助長された、主義主張と利害との無政府状態のただ中に生きている。この不自然な分配によって、文明ヨーロッパのすべての国で、住民の大部分は奴隷状態と見捨てられた状態とにつきおとされ、そして残りの人々さえも、利己心という致命的なガンに冒されて、自由で喜ばしい活動の活々した享受を奪われてゐる」(BdP. S. 3)。

このような情況の中で、彼は、社会変革を求める諸理論の発生を必然的なものと見た。しかし彼は、フランス

社会主義の一部(P・ルルー、E・ビュレ、ルイ・ブラン等。Vgl. S. 179)を除いては、既成の社会理論の多くに対して批判的であった。

彼の最も主要な批判対象は、ブルードンと「粗野な共產主義」(S. 27)である。彼は、これらの誤謬として、私的所有の廃棄による財産共同態の主張、生産と消費の物質的側面のみ注目する物質主義、「哲学の絶対的独裁」たる無神論、性急な暴力革命論、の四つを挙げている。その他に、彼は、「行為の哲学」を自称しながらも大衆の実践から遊離した、思弁的、すなわち「神学的」な社会理論である青年ヘーゲル派と、労働と自由競争との原理の一面的な把握に従って、社会の現状をただ解釈し、正当化することに終始する国民経済学とを批判した。これらの批判から我々の前に浮かぶのは、現状に対する鋭い批判と変革の意志をもちながらも、社会組織の根本的転覆と合法的暴力とをあくまで拒否する、改良主義的な民主主義者の像である。

では、これら諸理論にシュルツは何を対置しようとしたのか。それは、物質主義に陥らず、思弁性の雲界に飛翔もせず、「人間的自然そのもののうちに生産の本質

を探究し、肉体的要求と共に倫理的な、したがってまた法的な要求をもった人間を出発点および到達点とする」(S. 57) ことによって、人間の歴史を、物質的かつ精神的な生産と享受の全体性において把握しようとする試みであった。

その場合に前提となるのは、「生産の変化と生産有機体の現今の編制との歴史的・統計的観察」(S. 8) によって「生活の諸現象のあらゆる多様性を貫いている発展の単純な法則」(S. 7) をつかむことであり、「それを諸国民の生活の諸現象のうちにまで確認しよう」(S. 9) とすることである。我々は、彼がその法則をどのようなものとして認識し、どのような歴史観を展開したのか、ということの検討に移らねばならない。

シュルツにとって、歴史の主体は、本質的に創造的な人間的本性であり、したがって発展の原動力は人間の生産的活動にあった。「人間は、彼らが為すところのものに成る」¹²⁾。これが彼の歴史哲学の基本的テーゼである。歴史の発展法則とは、肉体的および精神的な財と享受との産出という「人間の創造の一にして不可分な過程」(BdP. S. 10) の運動の諸法則にはかならない。

この運動は、第一に、「生産と欲求」ないし「生産と消費」の相互制約的發展である。シュルツによれば、生産の過程は財のみならず享受の、したがって新たな欲求の産出過程である。新しい欲求は新しい生産を生み、生産の増大は欲求の増大を生む。こうして「欲求とその充足のための手段とは、一般に手に手をとって發展する」(S. 11)。「欲求→財の産出→享受」という全体的過程を把握したうえで、「いかにもそもそも生産性と消費性が相互に制約しあうか、したがってまたいかに特定の生産様式が特定の消費様式によって条件づけられているか」(S. 11)を、ひとは知らねばならない(ここで我々は、欲求充足、つまり生産のための手段の發展が、本質的生產過程を特定の生産様式へと媒介する鍵をなしていることに注目しておきたい)。

第二に、この過程は同時に、人間とその精神が自然から自立していく過程でもある。その単位は、歴史具體的には民族である。諸民族は、外的自然との闘争において、「共通の目的のための集団的活動」と「以前にはまどろんでいた資質と諸能力との多面的形成」(S. 11)とを通して、自然からの自立性を獲得していく。その際の、外

的自然に対する「この依存と自由の程度に依じて、しかも間断なく連続した諸段階に依じて、より低位のまたより高度の社会的形成態(Gestaltungen)が認められる」(S. 11)のである。

このように、シュルツは人類史の基礎過程を、生産と欲求との相互制約的發展によって規定される、外的自然からの自立の過程として把握した。この基礎過程を、「特定の生産様式」を経済的内容とする諸民族の「社会的形成態」へと形態化する媒介環をなす概念が、「労働有機体(Organismus der Arbeit)」であり、これこそ彼の歴史観の中核をなす概念なのである。

「労働有機体」は「二重の視点」(S. 17)から考察される。第一の視点は、全社会的規模で考えられた労働の配分、すなわち社会的分業であり、第二の視点は、「労働の運用(Betrieb der Arbeit)」すなわち技術的意味での生産様式あるいは労働様式である。したがって「労働有機体」とは、労働過程の特定のあり方(労働手段・労働編成のあり方)とその全社会的な関連として把握された、「生産の諸関係」(S. 56)の全体である。

第一の社会的分業について。シュルツの社会的分業論

は、いわば立体的な構造をもつ。社会的分業の端緒は男女間の性的分業に求められるが、本来的な分業は二重の方向において形成される。一方は、物質的生産における農工商の部門間分業の形成であり、他方は、物質的生産と精神的生産との分業である。後者は階級形成の端緒にほかならない。こうして、社会的分業の発展は、水平には物質的生産における農工商の順次的分立開花として、垂直には精神的生産の独立、身分ないし階級構造への骨化として現われる(物質的生産の分業については、彼は明らかにスミスの分業概念を受けついでいる。Vgl. Bd P. S. 9)。

第二の「労働の運用」は、なによりまず、生産過程で人間と自然との関係において考察される。シュルツによれば「生産の行動はつねに物的諸力と人格的諸力との結合と相互作用とに基づいている」(S. 64)のであり、生産においては常に「生産的人間諸力と、生産に仕える、知性をもたない自然諸力との関係」(S. 17)が問題となる。これは、生産過程における「生産的諸力」の主體的契機と客体的契機との結合の問題にほかならない。

主體的な生産力である生産的人間力とは、「人格的能

力、すなわち生産の目的のために活動する人格諸力の総体 (Inbegriff)」(S. 65)である。これは、『資本論』におけるマルクスの労働力規定(DK. I. S. 181)とほとんど一致する。

客体的な生産力である「知性をもたない自然諸力」とは、より正確には「機械を通して作用する自然諸力」(S. 16)あるいは「機械として作用する自然諸力」(S. 33)である。これら自然諸力は、さらに動物力と本来的な機械的諸力(水力・風力・蒸気力)とに分けられる。シュルツの定義によれば、労働手段のうち、人間を動力とするものが「道具」、人間以外の自然諸力を動力とするものが「機械」なのである。つまり、ここで具体的問題なのは、労働手段のあり方である。

「労働の運用」概念は、さらに労働における人間と人間との関係、つまり労働編成をも含む。労働過程における労働手段のあり方が具体的に問題にされる以上、それによって基本的に規定される労働編成のあり方も、当然問題とされざるをえないからである。シュルツはこれを、個人の孤立的労働から「集団的結合における(中略)活動の分割」(S. 37)へ、という方向でとらえている(後

者の分業的協業の概念について、彼は『国富論』第一篇第一章のピン・マニユファクチュアの例を引用して説明してゐる。(S. 37)。

以上で見たような二重の視点をふまえて、シュルツは人類史の発展過程を、この「労働有機体」の変革過程において見る。この過程は第一に、農工商の社会的分業の開花→発展(工商業の相対的増大)→再結合(農工あるいは工商の経営的、つまり同一資本の下への結合)の過程である。第二に「労働の運用」視点から見れば、それは「人間力のより少ない消費でより大きな成果を獲得するため」(S. 15)に、「人間の意志が知性をもたない自然諸力をますます支配下に置き、それらをより目的的な仕方ですべて生産に利用する」(S. 36 f.)という生産技術発展の過程であり、同時に、それに規定される分業的協業の成立発展の過程であった。つまり、「労働有機体」の変革過程は、分業と労働手段の発展という眼に見える具体的姿で、自然からの人間の自立化と労働の生産力の発展とを、表現しているのである。

このようなものとしての「労働有機体」は、「社会生活の内実」(S. 13)をなす生産と消費との全活動の基礎

であることよって、同時に、その上に立つ「国家生活すなわち政治的生産総体」(S. 6)を規定するものであった。シュルツによれば、立法とそれに対応する行政は「その本質的規定からして、常に社会の内実における変革に調和することを強いられる」(S. 51)ものだからである。

さて、これまでに見てきたシュルツの歴史観は、我々にマルクスの『経済学批判』序言でのいわゆる唯物史観の定式の有名な一節、とりわけその「社会構造の原理」を想起させる。すなわち、歴史における生産の規定的意義を一種の労働過程論において把握し、分業と生産諸力を基礎視角とする「労働有機体」概念において生産の諸関係の全体を把握していること、さらに国家を「労働有機体」によって規定される上部構造とみなしていることは、シュルツの歴史観の、いわゆる唯物史観に対する一定の先駆性を明らかにするものである。「一種の唯物史観」というコルニユのシュルツ評価は、まさにこの点にかかわっていたと考えられる。社会変革の理論についていったん保留する限り、我々もコルニユのこの評価に同意することができる。

二 世界史の発展諸段階

「労働有機体」の発展法則は、歴史叙述においては「社会的諸形成態」の階梯の連鎖へと形態化される。その際のシュルツの歴史認識の方法は、へ横倒しにされた「世界史」とも言うべきものであった。

「我々は、最も粗野な黒人諸民族からヨーロッパ文明の最後の分岐にいたるまでの社会的諸関係のこの同時的並存のうちに、我々が通時的に個々の国民の多くの古い諸時代のうちに発見すると同じ一統きの階梯を、認識する」(S. 10 f.)。このような方法が、シュルツの言う歴史的・統計的方法である(統計とは、彼にとって「存立しつづける歴史」である。S. 115)。

シュルツにとって、人類史の主体は抽象的には「本質的に創造的な人間本性」であるにしても、歴史叙述の際の具体的主語は、各民族であった。しかも諸民族は各々「特定の使命」に従っており、「だから彼らは、横隊をなして進むのではなく、一者が他者に続く縦隊をなして進むのではない」(S. 122)。したがって様々な社会的諸関係の同時的並存は、先進・後進という発展の遅速に

よるのではなく、世界史の各々の時期にその使命を終えた諸民族と、現在果たしつつある諸民族(キリスト教諸民族)との並存を意味する。つまり、過去と現在の様々な民族の社会的諸関係を類型的に把握した上で、その諸類型を時間軸に変換し、論理的に再構成した世界史が、シュルツの発展段階論であった。

このような歴史認識には、明らかにヘーゲル歴史哲学の影を見ることができ(16)。しかしシュルツにあっては、歴史の主体は「精神」ではなくて生産的人間であり、また世界史の具体的主語が各民族であるにしても、その「民族的精神」の内容は、人間の物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する社会的諸関係なのである。観念論から唯物論へと転倒されたヘーゲル歴史哲学。我々がシュルツの歴史観をへ分業と生産諸力の歴史哲学」とよぶのは、このような意味をこめてである(17)。

シュルツは、分業と生産諸力との発展に従って、世界史を次の四段階に区分している。

第一段階。手労働(Handarbeit)の時代。ここでは手がほとんど唯一の道具であり、男女間の性的分業以外に分業は存在しない。

第二段階。手工業 (Handwerk) の時代。ここで農工商の社会的分業が成立し、道具が生産に導入される。労働過程は、まだ孤立的・自己完結的である。

第三段階。「高度に分化された手工業的活動としてのマニファクチュア」(S. 37)の時代⁽¹⁸⁾。ここでは人間は、分解された労働過程の単純な一要素の担い手として、「機械として」(S. 69)の労働を強いられる。

第四段階。機械制度 (Maschinenwesen) の時代。マニファクチュアでの個々の作業は自然諸力にあてがわれ、人間は「機械を通して」(S. 69)労働することで肉体労働から解放され、「人間精神と外的自然との分業」(S. 40)が成立する⁽¹⁹⁾。そのことによって、同時に、人間は「より大量の自由時間」(S. 68)を獲得する。これらを物質的基礎とする〈自由の国〉への移行、がシュルツの未来像であり、そこに現われるユートピアが、奴隷のないポリス、農奴のない騎士世界とも言⁽²⁰⁾べき、自由平等の公民共同体としての「民主制」であった。

以上の段階区分は、基本的に労働様式によって、とりわけ労働手段の発展によって画されている。シュルツ自身、「我々は、物質的生産のための道具と機械とから、

物質的文化的立場全体を推定する。なぜならこれら労働諸用具は、文化の産物として、同時に文化についての証言を与えるからである」(S. 79)と明言している。このような認識は、『資本論』労働過程論でのマルクスの認識 (DK. I. S. 195) と全く一致している。換言すれば、シュルツのこの思想は明らかに、『哲学の貧困』から『資本論』労働過程論へと貫流するマルクスの労働手段の歴史理論的把握、つまり労働手段が経済的時代を画するというマルクスの歴史観の一つの系譜に、連なるものであると言うことができる。

三 社会変革の展望

シュルツが解明したと考えた歴史の発展法則によれば、機械制度の時代にはいった現在は、生産力の飛躍的發展による社会の富の増大の時期であるはずであった。しかし現実には、資本家と労働者間の所有の不自然な分配が、両者の階級対立を激化させつつある。

この「社会的弊害 (sociale Missstände)」の根底には、シュルツの表現によれば、「資本家が、幼年に到るまでの下層階級の力を極めて容易かつ低廉な仕方では我が物と

することができ、これを機械学(Mechanik)の代わりに使用し濫用しようという事情(S. 71)が存する。この事情から、「機械制度の完成による時間の節約にもかかわらず、多数の住民にとって工場での奴隷状態の継続は増大するばかりであること」(S. 68)および「私的権力の領域での所有の不自然な運動の不平等」(S. 25)が、結果として現われるのである。

ここでシュルツが直面しているのは、言うまでもなく、資本家的生産様式の本質の問題である。労働者が土地と生産手段とから分離され、資本家の支配の下でのみそれらと再結合しうること、つまり、生産手段の私有を媒介とする資本家の労働者に対する支配Ⅱ搾取関係としての生産関係、これこそ「社会的弊害」の根底にある「事情」の本質であった。

シュルツは、この資本家的生産関係(機械学の進歩を妨げさえする資本の搾取)と生産力の発展(機械制度の導入による労働軽減の可能性)との矛盾を、直感的にはつかんでいた。彼が歴史貫通的な生産力の発展過程(労働有機体の変革過程)を「自然」とみなし、それに対して現実の階級関係を「不自然」と見たことが、これを示

している。しかし問題は、彼が資本・賃労働という生産関係そのもの、つまり、生産手段が資本という姿をとり生産者が賃労働者という形態規定を受けること自体を、「不自然」とみなせなかったことにある。換言すれば、彼には、生産手段の所有関係としての生産関係の概念が、少くとも歴史認識の道具としては、なかったということである。彼の社会解剖のメスは、分配関係までしかとどかない。こうして「社会的弊害は、本質的に労働と所有の悪しき分配にのみ帰せられうる」(S. 60)。

ここで「労働と所有の悪しき分配」と言われることの具体的内容は、労働者の長時間労働とそれにもかかわらない低賃金である。それらを生み出す「事情」を理論的に説明しえぬまま、シュルツは、「国民的力の共同的利益」(S. 68)である自由時間の適正な分け前、つまり労働時間の短縮と、「増大する国民所得の、社会の全成員への調和的で相応的な分配」(S. 60)、つまり労賃引き上げとを、労働者の正当な要求として主張する。

しかし、これらの実現の契機は何なのか。シュルツが期待するのは、歴史発展の一般的法則に従った「漸次的改革と社会的有機体の自然治癒力」(S. 27)であるが、

彼に「悪しき分配」がいかにして生産され、再生産されているかという問いが欠落している以上、この分配関係とそれに基因する階級対立を、生産関係の内側から変革し解消する要因も可能性も、彼の眼には見えなかった。したがって「自然治癒力」は、階級関係の外側から持ちこまれるほかはない。そこから、彼は国家の役割に大きな期待をかけることになる。

すでに述べた通り、シュルツにあっては、国家は「労働有機体」を土台とする上部構造であったが、「労働有機体」が生産手段の所有関係としての支配関係を含まない以上、国家も超階級的なものとして把握されていた。彼によれば、国家は「社会体の頭」(S. 64)、つまり社会体の自己維持のための管理器官であって、社会の経済的構造に規定されつつも逆に「その都度の発展段階に相応する方向を与える」(S. 66)べきものなのである。したがって「国民財産と国民所得の個人々人への分配に関していえば、そのためにこそ、国家はその所有権法と相続法とをもって本来活動するものであり、だからまた、貧困と奢侈との著しい対照のうちに現われている社会的弊害に対して、まず第一に責任がある」(S. 51)のであ

た。国家による、所有権法と相続法の改正による所得の再分配、これが彼の解答である。換言すれば、結果的に彼は、下からの共産主義革命に対し、いわば「福祉国家」による上からの改良を「自然治癒力」として対置したのである。⁽²¹⁾この改良の彼方に、彼は、より大きな自由時間を得た労働者の参加する「民主制」を構想したのであった。

社会的形態規定を抜きにした生産諸力の発展についての確信と、人間の理性への信頼に基づいた、改良主義的なオプティミズム。眼前の不平等と階級対立に対する精確な認識と鋭い批判にもかかわらず、「不自然な分配」が「自然治癒力」によって除去されれば、「健全な有機体」の生々とした成長が示されるであろう、とする社会の有機体論的把握への傾斜。このような「社会有機体のオプティミズム」とも言うべきものが、シュルツの社会認識の基調をなし、彼の社会変革論を規定しているのである。このような社会変革論は、本質的に小ブルジョア的なものであり、実践的には一八四八年革命時の民主党左派の路線につながっていくものであった。⁽²²⁾

四 シュルツとマルクス

マルクスは、一八四四年、ヘーゲル法哲学との批判的格闘を通して「固有の対象の固有の論理」をつかみ、「人間解放」の歴史の必然性を論定するという課題に自覚的に向きあいつつある時、『生産の運動』に出会った。²³しかし、彼がこの書から何を学んだかを知るための物的証拠は、わずかである。直接の言及は、『経・哲草稿』第一草稿でのいくつかの引用に限られる。したがって我々は、まず情況証拠の検討から始めねばならない。

すでに見たように、思想的立場としては、私的所有を擁護し、共産主義と青年ヘーゲル派を批判するシュルツと、私的所有を含む一切の疎外の揚棄を目標として掲げ、独自の共産主義の立場に向かいつつあるマルクスとの相違は明らかである。ただ、国民経済学の理論的特質の把握とそれに対する批判とに関しては、マルクスはシュルツに学ぶところがあつたと考えられる。

シュルツは、重商主義→重農主義→産業主義(ミス)、という国民経済学の発展を、生産的労働概念の特殊(一部門での労働のみが生産的)から普遍(労働一

般が生産的)への進歩の過程とみなした(S. 115)。マルクスは同じ発展を、私的所有をたんに対象的存在と考へる立場から、労働をその主体的本質とする立場への移行の過程とみなす(Ms. S. 530 f.)。富の主体的本質としての労働一般の発見をもってミスの特徴付ける点で、両者は一致する。ただし、マルクスはその発見が「私的所有の枠内で」(S. 530)のものであることを断わっており、この一言が、両者を決定的に隔てているのではあるが。

また、シュルツは、国民経済学が労働という「生産のたんなる一契機」とらわれて、人間的自然の全体性を問題にしないことを批判したが(BdP. S. 57)、マルクスも同様に、国民経済学がプロレタリアを「ただ労働者としてだけ観察し(中略)人間として観察しない」(Ms. S. 477)ことを批判する。これは、国民経済学における「人格の物象化」を批判する視点であると言つていい。このような国民経済学批判の一視点を与えたこと、これがシュルツのマルクスへの第一の影響である。

では、このように思想的立場を異にする『生産の運動』の全体を、マルクスはどのように評価したのか。こ

れを、第三草稿中の次の文章が示唆している。

「全革命運動がその経験的基礎をも理論的基礎をも、私的所有の運動の中に、まさに経済の運動の中に見出すということ、このことの必然性は、容易に洞察される。物質的な、直接に感性的なこの私的所有は、疎外された人間の生活の物質的・感性的な表現である。私的所有の運動——生産と消費——は、従来のすべての生産の運動すなわち、人間の現実化あるいは現実性の運動についての感性的な啓示である。宗教・家族・国家・法律・道徳・科学・芸術等々は、生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般的法則に服する」(S. 536 f. 傍点強調は引用者による)。

生産の運動が、「自らを実現する人間的本性そのものの両側面」(BdP. S. 173) である生産と消費との相互制約的發展の過程であること、政治的生産も精神的生産(宗教・芸術・科学)も、物質的生産と同じ生産の一般的法則に従うこと、これらはシュルツの基本的主張であった。上のマルクスの文章は、彼がこれらの認識を、用語もほとんどそのまま、我がものとしたことを示している。歴史發展の基礎にあって政治的・精神的生産を制約

するものとしての「生産の運動」「生産の一般的法則」という概念、これが、彼がシュルツから受け取った第二のものである。

しかし、マルクスはもちろん、シュルツを無批判に受け入れた訳ではない。彼は、シュルツの叙述する従来の生産の運動が、人間の生活の疎外の表現である「私的所有の運動」にすぎないことを指摘しているからである。

このことは、彼が、従来の生産の運動の把握に関する限りでシュルツを評価しながら、私的所有への批判的認識の欠如の点で彼を批判していることを意味する。シュルツが生産の運動の解明によって、革命を回避しうる社会の漸次的改良の展望を与えようとしたのに対して、「歴史の全運動は共産主義を現実的に生み出す行為」(Ms. S. 536) とみなすマルクスは、従来の生産の運動(私的所有の運動)を〈人間社会の歴史〉に位置付け、シュルツとは逆に、その運動のなかに革命の必然性をさぐるとうるのであった。

マルクスが『生産の運動』の個々の論点を具体的にどのように読み、そこから何を受け取ったかということは、『経・哲草稿』第一草稿前段において最も明瞭に示され

ている。

第一草稿前段(労賃・利潤・地代)は、さらに三階程に分けられる。第一階程でマルクスは、国民経済学が所得三源泉の三位一体と表象する市民社会が、私的所有に基づく三階級対立の場であることを示し、第二階程で、市民社会の内的運動法則である競争と蓄積の帰結として資本家と労働者の二大階級対立を導出し、市民社会の傾向的極限像を示そうとした。その際、彼が主な論拠としたのが、シュルツの社会的分業の再結合論であり、さらに、そこで彼は、蓄積が「私的所有の支配の下では少数者の手中への資本の集中」であるが、技術的(使用価値的)視点から見れば、それは生産諸力のより広汎な結合による生産力発展の過程であること、そして今や、この生産力の発展は資本家的私的所有と矛盾に陥っていることを、シュルツの叙述から読みとったと考えられる。これが、彼がシュルツから受け取った第三のものである。

最後に第三階程でマルクスは、こうして資本という歴史的形態をとった私的所有の支配する社会としてとらえた市民社会を、歴史の中に位置づけ、将来を展望しようとする。この位置づけは、人間にとっての根源的自然で

あり生産手段である、土地に対する私的所有の歴史的形態の転化の問題として、したがって地代欄で、なされる。

その際彼は、シュルツの生産諸力の結合形態論としての土地集積論を、社会変革の理論へと読みかえることで新しい歴史観を獲得した。土地所有と生産力の発展についてのシュルツの図式はこうである。封建的大土地所有(農奴制・土地Ⅱ生産力の集中)→土地所有の分割(自由な小所有・生産諸力の分散)→新しい連合体(自由な小所有・大規模農耕による生産諸力の再結合)。ここで「新しい連合体」とは、具体的には「共同的経済計画に従ったより大きな面積の開発」(BdP. S. 58)を行なう小所有者の農業組合、あるいは株式合資会社である。

マルクスはこの図式を換骨奪胎する。封建的土地所有(私的所有・人格的關係)→資本家的土地所有(私的所有・物象的關係)→土地に適用された連合体(私的所有の揚棄・人格的關係の再建・大規模農耕)。これが、私的所有を前提したシュルツの土地集積論を社会変革論に読みかえることで、ここでマルクスが獲得した歴史観である。

したがって、生産力の発展に基礎づけられた「自由な

結合と共同」(Bd.P. S. 58)としての連合体を展望すること、新しい社会形成の原理に素材を提供したこと、これがシュルツのマルクスに対する第四の意義である。しかし、歴史の展望を生産力視点からの連続性においてのみとらえるのではなく、連続(生産力の発展)と切断(私的所有の揚棄)との二重の視点においてとらえたこと、これが、マルクスのシュルツを超える点であった。

そして、この二重の視点に立って、近代市民社会(資本家的私的所有)を「私的所有の発展の最後の頂点」(M.S. S. 520)として歴史的に定位し、「人間解放」を私的所有の揚棄の上に立つ連合体として展望するこの歴史観において、唯物史観確立への第一歩が踏み出されていると言えるのではないだろうか。

しかし他方、『草稿』の文面に見る限り、マルクスはシュルツの歴史観のある重要な論点を見過している。それは、労働手段を中心にした生産諸力の概念であり、労働手段によって画される歴史の発展段階認識である。その意味では、彼はまだシュルツの歴史観の意義を「十全には受けとめていない」⁽²⁷⁾。

とは言え、それは理論的成熟度の問題であるよりは、

むしろ方法的問題である。マルクスは、『経・哲草稿』においていったん所有論的・生産関係論的視点に徹することによって、特殊歴史的な形態規定を受けた生産関係(疎外された労働)が自己再生産の運動を通して不断に存立しているその内的構造を概念的に把握することを、自己の課題としたのであった。このような問題意識こそ、シュルツに欠如しているものであり、マルクスがシュルツを超えている本質的な点である。

この問題意識によって、彼は、歴史貫通的な範疇としての生産力を資本の生産力へと解消することを免れると同時に、シュルツが説明しえぬまま提示した生産力と生産関係との矛盾の事実を「矛盾」として了解し、労働者の解放を分配関係の改革ではなく、生産関係の変革に求めることができたのであった。

しかし、あえて一言付け加えれば、マルクスがシュルツの歴史観を十全に受けとめなかったことによって見落としたのは、物質的生産諸力の一定の歴史的発展段階を具体的な姿でとらえる眼であった。「類的存在」という言葉で、人間と自然との物質代謝を人間存在の基礎構造としてとらえる労働過程論的視点に立ちながらも、人間

と自然を媒介する労働手段の歴史理論的意義を見落したために、「類的存在」を物質的生産諸力の歴史的發展の具体的形態に結びつけることが、一八四四年のマルクスにはできなかったのである。

シュルツのマルクスに対する「十全な」影響を考える場合、我々は『ドイツ・イデオロギー』（一八四五—六年）、「哲学の貧困」（一八四六—七年）へと眼を移していかなばならない。そこでのマルクスの分業概念、労働手段概念の形成あるいは変容を検討すること、それが、我々の次の課題である。

- (1) シュルツの生涯については、W. Grab, W. Schulz: *Ein bürgerlicher Vorkämpfer des sozialen und politischen Fortschritts*. Beihft zur IWK, Heft 2. Berlin, 1975. 参考書註一下。
- (2) W. Schulz, *Die Bewegung der Production: Eine geschichtlich-statistische Abhandlung zur Grundlegung einer neuen Wissenschaft des Staats und der Gesellschaft*. Zürich u. Winterthur, 1843. (以下、BdP と略記)
- (3) *Allgemeine Deutsche Biographie*, Vd. 32. Leipzig, 1891. S. 752.
- (4) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*.

MEW Ergänzungsband, 1. Teil. Berlin, 1968. (以下、Ms と略記)

- (5) K. Marx, *Das Kapital* Bd. 1. Berlin, 1947, S. 392. (以下、DK. I と略記)
- (6) A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werke*, Bd. 2. Berlin, 1962. S. 119.
- (7) *ibid.*, S. 124. ロルニョの所説については広松渉氏の紹介がある。『マルクス主義の成立過程』一九六八年、五一—五四頁。
- (8) G. Kade, W. Schulz und die *Herausbildung der politischen Ökonomie bei Marx*. Ein Einleitung zur W. Schulz „Bewegung“. Glashütten in Tannus, 1974. 中隆次「シュルツとマルクス」中央大学九十周年記念論文集所載、一九七五年、等参照。
- (9) 後に見るように、シュルツの社会変革論は、ハイ・マン等の立場に近々。
- (10) 山中氏は、シュルツが青年ヘーゲル派の中で、ヘッスの社会主義に対しては「一歩の進歩」が期待できるとして一定の評価を下している」と述べられるが（前掲論文、五九五頁）「これには根拠がななく納得しがたし。一八四六年の論文では、シュルツはヘッスの思想を「反科学的な暗殺計画」として非難している。W. Schulz, *Communismus*. Das Staats-Lexikon, hrsg. v. C. Rotteck u. C. Welcker, Bd. 3. Altona, 1846. S. 333.

- (11) 「歴史的・統計的」方法の意味については、山中、前掲論文、五九一頁、参照。
- (12) W. Schulz, *Die Veränderungen im Organismus der Arbeit und ihr Einfluß auf die sozialen Zustände*. Deutsche Vierteljahrschrift. 2. Heft. Stuttgart u. Tübingen, 1840. S. 20.
- (13) シュルツ自身、一度だけ (S. 25) であるが「労働力」という語を使用している。
- (14) シュルツのこの道具と機械の概念的区別を、マルクスは『資本論』で引用し、批判している。DK. I. S. 392. なお、一八六三年一月二八日付のマルクスのエンゲルス宛書簡をも見よ。MEW Bd. 30. S. 320.
- (15) 杉原四郎『経済原論 I——「経済学批判」序説』一九七三年、一四頁。
- (16) シュルツがその歴史哲学を「ヘーゲルに学んだ」ことについては、グラープの指摘がある。Grab, *op. cit.* S. 112.
- (17) 精神的生産の発展について簡単にふれば、言語形成に精神的生産力の発展を見、宗教・芸術・科学を社会的分業と類比させるといふのが、その特色をなす。したがってこれは、文化に適用された〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とすることができよう。
- (18) 仲村政文氏は、「マニエファクチュアという用語は歴史的概念としてはマルクスに固有のものである」と述べているが、正当でない。仲村「マルクス生産力論の源泉」
- (19) 鹿兒島大学『経済学研究』第三号（一九六八年六月）、七五頁。
- (20) 山中氏は、「機械を通して」の生産力視点と「機械として」の生産関係視点とを、シュルツが明確に区別していると述べているが（前掲論文、六〇七頁）、シュルツにとっては、これはむしろ労働様式の技術的な発展段階の違いである。
- (21) シュルツの自由時間論については別稿を用意しており、詳しい検討はそれに譲る。
- (22) グラープは、この点でシュルツは「ヘーゲルとラサールの間に立って」と評価している。Grab, *op. cit.* S. 120.
- (23) 三月革命期のシュルツの思想と行動については、Grab, *op. cit.*, S. 121 f. 参照。なお、マルクスとエンゲルスの『一八五〇年三月の中央委員会の同盟員への呼びかけ』での「民主主義的小ブルジョア」批判は、そのままシュルツへの批判としても読むことができる。MEW Bd. 7. S. 247 f.
- (24) K. Marx, *Kritik des Hegelschen Rechtsphilosophie*, MEW Bd. 1. S. 209.
- (25) その機縁は、おそろくハンスの論文「貨幣存在について」である。広松、前掲書、五四頁。Kade, *op. cit.* S. VIII. 参照。
- (26) 階程区分については、N・ラービン、細見英訳『草

稿』における所得の三源泉の対比的分析」、『思想』一九七一年三月号、工藤秀明「原・経済学批判としての一八四四年『草稿』分析序説」上、名古屋大学『経済科学』第二五卷第四号（一九七八年三月）、参照。前者の区分が時間的作業順序によるとすれば、後者はむしろ理論構成上の区分とすることができるとする。階程区分とその意味について、ここでは後者による。

(26) 工藤、前掲論文、一三二頁、参照。E・マンデルは、

第二階程地代欄でマルクスが「リカード理論にしたがって」資本と土地所有との合体、地主の資本家化を主張している」と述べているが（山内昶・表三郎訳『カール・マルクス』一九七一年、三九頁）、マルクスはまだリカードを読んでおらず、そこでの直接の論拠はシュルツである。

(27) 広松、前掲書、五四頁。

（一橋大学大学院博士課程）